

やはり大変なことです。

幸せ道はアホ一息

# 苦難で深まった 兄妹の絆



え・城谷俊也

七月のテーマ

社員のおかげ

## 家

族経営には、様々なメリツトがある一方で、身内ならではの難しさもあります。A氏も

その難しさを体験した一人です。

A氏は、かつて両親が経営していた飲食店を引き継ぐことになりました。当時は別の会社を営んでいたのですが、二人の妹にも相談して、「兄妹で力を合わせて店を引き継ごう」とオープンを決めたのです。両親はとても喜んでくれ、友人や知人も、開店までに力を貸してくれました。多くの人に支えられての船出でしたが、順調だったのは最初の頃だけでした。

A氏は別会社を営んでいたのですが、実質的に店を切り盛りするのは二人の妹でした。二人の内、飲食店で働いた経験のある姉が、いつも妹に指示を出していました。

最初は従っていた妹ですが、「これはこうしなさい」と頭ごなしに言われると、次第にストレスが溜まりました。妹にも、「こういう店にしたい」という夢があり、その意見を口にすると、ケンカが始まります。姉妹の仲は日増しに険悪

になり、口も利かなくなっていました。そうした雰囲気は伝わるのか、客足も減っていききました。

A氏が時々店を訪れると、店内には重い空気が流れていました。妹たちの不仲を知ってはいたものの、「よく一人で話し合うように」と伝えるだけで、気に留めませんでした。それどころか、「なぜもっと気持ちよく働けないのか」と、不満すら持っていました。

A氏はA氏で、どうにか店に人を呼ぼうと地域の付き合いに顔を出し、「自分の力で店がもっている」という自負があったのです。開店一年目の暮れのこと、些細な言い合いから姉妹が大ゲンカとなり、妹が店を飛び出していきました。そして、その日に車で大事故を起こしてしまつたのです。

時を同じくして、A氏も日頃の無理がたたたり、一週間入院することになってしまいました。多忙な日々から一転、ベッドの上でA氏が考えたのは店のことでした。

「もし妹たちがいなければ、ベッドで寝てなんていらなかった。

ゆつくり静養できるのは、二人が店を守ってくれているからだ」

実際、店が継続できているのは、二人の妹のおかげでした。それなのに「自分がやっている」という奢りから、社員である妹たちの相談をきちんと受け止めることもしなかつたのです。

A氏は、自分の心の内に、「身内だからうまくやれるはずだ。大丈夫だろう」という甘えがあったことを反省しました。そして、「兄妹で助け合いながら、地に足のついた仕事をしていこう」という開店当時の意気込みを思い出し、気持ちを新たにしました。

その後、大ゲンカをして飛び出した妹も、「心配をかけてごめんなさい。もう一度働かせてください」と頭を下げ、店に戻ってきました。事故を機に初心を見つめ直し、多くの人の助けで今があることを痛感したのでした。

兄妹の心が一つになったことを両親は誰よりも喜んでくれ、店の雰囲気が良くなるにつれて、少しずつお客様も戻り始めたのです。